

模擬店舗のキャリア支援機能

学生ジョブコーチの実践から

The function of simulation shop as carrier support

中鹿直樹・渡邊舞・立花周太・吉尾玲美・土田菜穂・望月 昭

Nakashika, N., Watanabe, M., Tachibana, S., Yoshio, R., Tuchida, N., & Mochzuki, A.

立命館大学

Ritsumeikan University

Key words: 職場実習 学生ジョブコーチ 行動的 QOL

問題

立命館大学では、学生ジョブコーチの実践研究を行い、障害のある生徒や成人を対象に、就労先・実習先の職場での援助を行ってきた(望月他, 2010)。また大学内に模擬喫茶店舗を設け、就労実習の場として援助を行っている(中鹿他, 2012; 尾西他, 2013, 小島他, 2014)。本報告では、支援事例を通して模擬喫茶店舗が対象者のQOL拡大を支援する場面としてどのように機能しているかについて検討する。

事例

対象者 A 支援学校に通う高等部2年生の男子生徒 B 君が、支援学校における職場実習の一環として模擬喫茶店舗での実習に参加した。

期間 連続する5日間の実習を行った。初めの3日間は午前中のみ、残り2日間は午前と午後の実習を実施した。

場面 大学内に設けられた模擬喫茶店舗を使用した。この店舗は一般的な喫茶店の仕様(客が座る席、レジカウンター、厨房施設からなる)となっていて、対象者は店員として実習に参加した。店長役ともう一人の店員役は、大学院生と大学生が担当した。他に直接支援を行う係(ジョブコーチ:JC)と撮影・記録係がいた。

業務 対象者が行う業務は、1) 開店準備、2) 接客(客の入店から注文を取り、品物を提供する)、3) 会計、4) 閉店作業、5) 売上計算、6) その他の作業であった。

事前情報 対象生徒の所属する学校から、今回の実習にあたって目的として挙げられている情報は次のようなものだった。1) わからないことがあるときに、質問ができるようになること、2) 客がいるときだけが仕事ではなく、準備など臨機応変にできるようになってほしい、こと。

実習結果 模擬喫茶店舗を利用した学生ジョブコーチによる支援により、対象生徒の多くの「できる」を見出すことができた。例えば、手がすいている時には、先を見越してやっておくべきことを済ませることができる、

一回失敗したことについては、事前に行うことにより失敗を回避することができる、などである。こうした行動については、実習前の情報として学校から、実習中に達成すべき目標や目的として挙げられていた内容であった。これらの「できる」は実習までは確認されていなかったということができる。

これらの「できる」を見出すにあたっては、特に細かい直接的な指導をしたわけではない。対象生徒が仕事の流れを経験する中で、周囲のスタッフが「少し待つて」いられたこと、うまくできたらそのことを「強化する」ことを繰り返す、そうした過程の中で職務に関連した行動や工夫をする、あらかじめ準備をするなどの行動が出現するようになったと考えられる。

まとめ

模擬店舗であることの利点は、対象者に応じたさまざまな“試行”を行うことができ、それを通じていくつもの“できる”を発見・記述可能なことである。本事例では、それ以上に「待つ」ことが重要なポイントであることが示されたといえる。試すこと、待つことは同時に成立しうることでは相反することではない。また模擬店舗でなくとも試してみる、待つてみることは普段の生活や学校の中でも取り入れることができる支援といえる。

文献

- 小島 遼他 (2014) 疑似就労場面における「仲間を教える」役割設定が高等部生徒の行動におよぼす効果 日本対人援助学会第6回大会
- 望月 昭他 (編著) (2010) 対人援助学の可能性 福村出版
- 中鹿直樹他 (2012). 知的障がいのある高等部生徒の就労実習における職業行動への自発的関与を促進する条件 日本行動分析学会第31回年次大会
- 尾西洋平他 (2013) Café Rits; ポートフォリオを構築するための模擬喫茶店舗 日本対人援助学会第5回大会